



【イエスキリストの模範に従いましょう。】

聖書本文:ヨハネの福音書13章1-5節,14-17節・暗唱聖句;ヨハネの福音書13章14節

説教者: 鄭南哲牧師
(Rev.Jung nam-chul)

愛する信仰の家族のみなさん! 一週間の間もお元気でしたか。まず、お互いに励まし合いしたいと思います。
“あなたは我らの教会に必要な存在です、大切な存在です。”2011年度の間も神様の栄光と神様の国と主の教会のために精一杯仕えて来た、みなさんの上に神様からの大いなる慰めと祝福がおとずれ、新しい2012年度にもさらなる神様の恵みと助けによってすごせますように、主イエスの御名によって祝福します。アーメン!

2012年4月初めの主日です。特に今週から我らの主イエスキリストの受難を黙想し、敬虔に過ごすべき受難週が始まりました。今日は十字架につけられる前にイエス様ご自身が表わしてくださった姿について考えてみたいと思います。今日の本文はあの有名な場面です。イエス様が弟子たちの足を洗っておられる場面です。十字架を背負う最後の瞬間までイエス様の心を支配していた有る一な関心事はご自分の死や苦しみなどではなく、愛する人々への仕えることでした。仕える姿はイエス様のきよい習慣だったのです。今日の本文でまず、一緒に考えてみるがあります。はたして、イエス様が弟子たちに仕えてことは今回だけの一回性イベントだったのか、まことのイエス様の人生のスタイルだったのかです。

ヨハネの福音書13章1節をみてみてください。“さて、過ぎ越しのまつりの前に、この世を去って父のみもとにいくべき自分の時が来たことを知られたので、世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残るところなく示された。”イエス様は弟子たちをどれくらい愛されましたか。“その愛を残るところなく示された”そうです。‘残るところなく’愛されたことが自然に仕える姿で表わされたのです。すると、イエス様ご自身は仕えることに対してどのような心構えでおられたのでしょうか。

「救い出された人の人生は仕える人生です。」

よく知られているマルコの福音書10章45節を読んでみましょうか。

“人の子が来たのも、つかえられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです。”

“人の子が来たのも”という表現はイエス様の使命を表わしています。いつかイエス様の伝道の習慣について話した時、この地に来られたイエス様の一番大切な使命は失われた魂を探し出して 救うことであることを申し上げました。ところが、今日の箇所によるとイエス様のもう一つの使命は仕えることだったと言った方が正しいと思います。しかし、みなさん、救いと仕えることとは切り離されるものでしょうか。ここで、救いと仕えることは結局一つであることがわかります。

愛する信仰の家族のみなさん!仕えることの核心はなんでしょうか。仕えることとは結局、仕えられる対象に対して最善の有益を求めることではないでしょうか。主イエスキリストは人類に対する最善の有益は救いであることをご存知だったのです。そういうわけで、我々に仕えて、救うためにご自身の命をあがないのいけにえとしてささげようとしたのです。

もう一度、マルコの福音書10章45節を黙想してみましょう。“人の子が来たのも、つかえられるためではなく、かえって仕えるためであり、また、多くの人のための、贖いの代価として、自分のいのちを与えるためなのです”そうです。イエス様が来られた目的は仕えるためでした。仕えることの絶頂がまさにご自分の命をささげられたことであり、そして、その結果が人類の救いだったのです。しかし、仕えることとは命をささげるほどの大したことだけではなく、些細な事でもできることをイエス様は弟子たちに教えなければなりません。そういうわけでタオルと洗面器をもって弟子たちの足を洗われたのです。小さいものに行った些細な事も命をささげることと等しく大切であることをイエスご自身が実際に教えてくださったのです。年寄りの方々が2階に上げられるとき、支えてあげたり、荷物を持ってあげたり、子供たちをかえりみ、教会の奉仕の面においても人々があまりやりたがらないことを喜んでやり、教会に新しく来られた方々にあたたかく案内し、フォローしてあげるなど、小さいことの実践から仕えることは始まります。

「仕えることの見本となってくださったイエス様」

本文を注意深く読んでみるとイエス様は弟子たちの中でだれかが足を洗ってあげることを待っていたかのように見えます。足を洗うということは一般的にユダヤ人の慣習によると、サンダルを入っていたころ、ものすごく、あつい砂漠ではお客さんへの礼儀でした。家の門のそばに水がめとたらいを用意しておいて大切なお客さんが来ると洗ってあげることが最善の仕えることだったのです。ところが、弟子たちの誰ひとりもそれには気を使わなかったよう

にみえます。ヨハネの福音書13章2節は“**夕食の間のことであった**”と書かれています。実際、足を洗うことは夕食の前に行われるべきのことでした。ですから、もしかすると、イエス様はそれまでに弟子たちの行動を待っておられたかもしれません。しかし、弟子たちのほうから、なんの行動の気配(けはい)がなかったため、イエス様は夕食の途中で起き上がられました。当然、夕食はまだ、終わってないままだったのです。

しかし、イエス様はさきに、急いで、食事をすませて、この大切なチャンスを見逃しませんでした。そして、この実行の後、イエス様は自分の本音を表わしてくださいました。“**わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするように、わたしはあなたがたに模範をしめしたのです。(ヨハネ13:15)**”イエス様の実践というのは‘模範(example)’でした。‘模範’の意味はなんですか。だれかが、おいかけてくるようにすることではありませんか。ここでだれかはだれでしょうか。イエス様の弟子たちではないでしょうか。弟子というのは‘従って行く者(follower)’という意味です。

ですから、自分がイエス様の弟子だと思っているのであれば、その方の模範に従ってやることは当然のことではないでしょうか。しかし、なぜ、そういうふうにはできないのでしょうか。つねにあきらめられない **自己中心的でな自分の思いのためではない**でしょうか。イエス様を我々が信じているのであれば、我々はみなクリスチャンであり、そしてキリストの弟子だともいえます。そうであるなら、**私たちが小さいイエスとなってイエス様が表わして下さった模範に従って生きるべき**です。

第一ペテロ2章21節をみてください。“**あなたがたが召されたのは、実にそのためです。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残されました。**”その中でも、今日の御言葉によると、イエス様が表わして下さったように仕えることはイエス様のきよい習慣としての模範でした。

「仕えることを可能にされた謙遜」

愛する信仰の家族のみなさん!イエス様は軟弱な弟子たちに仕えるためにご自身がひざまずく謙遜を表わしてくださいました。イエス様の姿には真の謙遜がありました。この地上での馬小屋での誕生から、十字架につけられて死なれるまで謙遜が秘められていました。2011年度の一年間みなさんにとってどんな日々でしたか。荒野のような苦しい時間もあつたでしょうか。荒野のように先が見えない時もあつたらうし、自分の人生があまりにも暗くて明日が来ないような絶望もあつたらうし、周りには自分を励ましてくれるだれもないような寂しさもあつたらうし、荒野で豊かに食べたり、飲んだりすることがとうてい大変なことのような経済的な苦しみを通って来た方々もいるかも知れません。砂漠にある毒サソリなどが人に危害(きがい)を加えるのように自分に傷つけさせたり、苦しませるような恐ろしいこともどれほど多かつたのでしょうか。

旧約聖書申命記8章2節を見ますと、我々にある時こんな荒野のような人生を歩ませられたのは我々に向かって神様の一つの尊い目的があつたことが分かります。“**あなたの神、主が、この四十年の間、荒野であなたを歩ませられた全行程を覚えていなければならない。それは、あなたを苦しめて、あなたを試み、あなたがその命令を守るかどうか、あなたの心のうちにあるものを知るためであつた。**”(英語の聖書でこの箇所を見てみますよ、もっとその目的が明確になります。(Remember how the LORD your God led you all the way in the desert these forty years, to humble you...Verse3:He humbled you!)”つまり、神様は神の民イスラエルたちを荒野の時間をゆるして下さったのは我々を神様の御前でへりくだらせるためであり、謙遜を教えるためであつたことが分かります。

愛する神の家族のみなさん!人間の最大の問題は高ぶり、高慢なのです。高ぶりの人は仕方がありません。教えられません。なぜなら、自分が神のようだからです。すべての人を裏で自分が判断し、すべてのことに自己中心で、自分の心、思い、経験、自分の基準で合わせようとする高慢が我々にあるのではないのでしょうか。神様はイスラエル民たちが自分たちの望み、願い、思い通りにならなかつた時、絶えずつぶやきながら恨んだり、不平不満を出したため40年間荒野での厳しい訓練をさせたのです。そうだったのにもかかわらず、多くのイスラエル民たちは徹底的に自分を探らず、結局その不平不満、恨みの姿勢を捨てられなかつたため約束の地カナアンに入ることができませんでした。ちょっと神様ってひどいのではないかと思われませんか。

しかし、愛するみなさん!よく考えて見て下さい。どうして私たちには感謝より恨みが、不満をつぶやく時が多いと思えますか。そうです。我々の心の奥底にまだまだ完全に捨てられてない自己中心の高ぶりがあるからです。相手が、他の人々が、周りの環境が、すべてのものが自分の思い通りに、自分の願い通りになってほしいのに、そうなってくれないことにいらいらしてしまいます。感情的になり、神経的になってしまいます。ですから、感謝って言う、恵みって言う言葉は知っているだけで、実際の自分の心と生活にならず、失っているのではないのでしょうか。そのような人々は表ではたえず自分の長所と他の人の短所を比較しながら、自分がかなり偉そうに考え込んでいるが、心の奥底では自分の短所と他の人の長所を絶えず比較しながら自分をますます苦しませていってしまいます。そのような人は決してへりくだって仕えることができません。神様は人にあるその高慢を打ち破り、謙遜を教えるために時

には、荒野の道を歩ませてくださいます。どうしてですか。人って苦痛と試練にぶつかった時こそ、神様の御前で自分を低くさせるからなんです。自分の限界にぶつかった時こそ心から切に神様を求めることになりますから。ようやく自分を探ることになります。どうしようもできない時やっと心から主をより頼むことになります。神様は我々が多くのことをするより、根本的に変えられることを望んでおられます。まことの神様の人はイエス様のように柔和で、自分を低くし、謙遜した者です。自分を低くし、謙遜な人だけがイエス様のように仕える人生を送ることができます。愛する信仰の家族みなさん！仕えることは選択肢ではなく、主の命令なのです。自分がやる気がある時、時間の余裕がある時、気分がいい時やって、そうじゃない時はやらなくてもいいや！とすることではありません。主イエスキリストが直接模範として見せながら、我々もそのように従えるように命令して下さったことでした。

ヨハネの福音書13章13-14節をみてください。

[あなたがたはわたしを先生とも主とも呼んでいます。あなたがたがそう言うのはよい。わたしはそのような者だからです。それで、主であり師であるこのわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたもまた互いに足を洗い合うべきです。]

みなさん、仕えることはイエスキリストを主として告白する人々への神様の命令です。そうするのであれば、我々の選択は一つです。主なる神様にどうやって従うべきなのかだけを考えることです。もっと持っているものが、少なく持っている人々に、もっと強い者が強くない者に、便利に暮らしている者がそうでない人々に 仕えることは聖書的な原則です。ですから、まだ健康であるならば、その健康と人生の知恵をあなたがたを必要としているところに行ってもう一度、仕えてみませんか。

2012年初めの主日を迎えるようになりました。我らの主イエスキリストは天の王座を捨てて、しもべのようにこの地に来られました。そして、神様の御子イエスキリストがご自分のすべてを与え、その方をしたう弟子たちに仕えるようにと命じておられるのであれば、我々も新しい2012年度にも上着をぬいで、タオルをもって仕えようと決心しようではありませんか。これからののこりの人生、仕えられる者ではなく、仕える者として生かさせてください。という決心です。

アッシシの聖者(せいじゃ)と呼ばれていたフランシスコ(Francis)がラベルナー山でささげた有名な祈りはいまでも残って伝えられています。“主よ。私は主のように仕えながら苦しみを受けたことはありません。私の体にはくぎの痕(あと)がありません。私にも主の苦難を知らせてください。”どれだけ切に祈ったのか、神様は彼の祈りの答えとして彼の手と足に5箇所のかぎの痕ができたそうです。それでは、みなさん、2011年度一年間をしばらく振り返って見ましょう。そして、みなさんの手と足を見てみてください。今年みなさんが歩んで来た今までの手足にどんな跡が残っているでしょうか。もう一度、我々の御前でひざまずいて仕えてくださったイエス様を見上げましょう。今週はイエスキリストが十字架につけられる前の最後の受難週間が始まります。十字架につけられるほど、私たちを愛し、仕えてくださった手と足、イエス様の御体をもう一度黙想しながら、2012年度にもう一度、主の手足、心臓となって、謙虚に主に仕え、主の教会を仕え、人々に仕えるみなさんとなりますように祝福します。イエス様のような仕える心、姿勢が我々にも身につけて、神様の栄光を表わしていくクリスチャンプレイズチャーチのみなさんとなりますように我らの救い主イエスキリストの御名によって祝福します。 アーメン！